

変わる日本の「暮らし」と「まち」

新たな産業と人のつながりを創り
日本の魅力を発信する新しいまち

東京都大田区 羽田空港跡地
地区土地区画整理事業
(2016年・平成28年)

阿部民子

text by Tamiko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata



様々な図形パターンが配置された歩道

首都圏、そして日本の空の玄関口でもある羽田空港。その歴史は1931（昭和6）年に遡る。広い干潟を利用して東京飛行場として開港。戦後はGHQによって接収され、1958年に全面返還される。「東京国際空港」（通称、羽田空港）と改称され、日本の経済発展に伴い徐々に沖合を埋め立て、拡張を続けてきた。

空港の沖合展開に伴って生まれた空港跡地の一部（羽田空港跡地第1ゾーン）に、7月、新しいまちが誕生した。場所は、京浜急行

電鉄空港線および東京モノレールの天空橋駅の真上。約16・5ヘクタールに及ぶ広大なエリア。

今回オープンしたのはその一部、大規模複合施設「羽田イノベーションシヨシティ」と交通広場だ。天空橋駅から地上に出ると、スタイリッシュなデザインのバスシェアルターが並ぶ広々とした交通広場が広がる。一角には羽田の歴史を伝える顕彰碑や解説板、歴史タイルのあるスペースなどがある。居心地のよさそうなベンチも備えられ、交通の結節点としてだけでなく、

撮影スポットになっているという。

地下と上空に阻まれた土台作り

空港跡地の有効利用に関しては、2010年に国（国土交通省）と東京都、地元区（大田区・品川区）が「羽田空港跡地まちづくり推進計画」を策定。そこで、この地区を空港・市街地近接性を活かした創造と交流ゾーンとして、産業・文化交流施設や多目的広場などを整備することが定められた。それに基づき、大田区は2015年に「羽田空港跡地第1ゾーン整備方針」を策定。壮大なまちづくりが始まった。

しかし、かつて滑走路などがあった広大な土地に、新たなまちを作るには、大規模な都市基盤整備が必要だった。その重責を担ったのが、UR都市機構だ。経緯について、大田区空港まちづくり本部空港まちづくり課の戸塚俊二係長に伺った。

「整備方法の検討を重ねた結果、大規模な土地区画整理事業が最も有効な手段と判断しました。ところが、大田区ではあまり経験のない事業。しかも、本年に予定され

ていた東京オリンピック・パラリンピックまでという限られた期間でやらなければならない。そこで、土地区画整理事業に関して豊富な経験と実績を有するURさんに協力を依頼しました」

URはこれまで積み上げてきた経験とノウハウがあるとはいえ、この地区ならではの難しさもあった。地下には東京モノレールや京浜急行が通っているうえ、上空は飛行機が飛び交い、厳しい高さ制限がある。

その難題をどうクリアしたのか。UR東日本都市再生本部の丸田浩史が話す。

「鉄道施設の躯体に影響が出ることは許されません。そのため、上部を盛土するときは軽量盛土材を使うなど、ミリ単位でも影響が出ないように観測をしながら細心の注意を払って工事を進めました。また、航空制限のかかっている地区ではクレーンなども立てられないため、飛行機の飛ばない夜間の工事にするなどの工夫を重ねました」

工事を進めるにあたり、国土交通省や東京都、大田区、警察、鉄道などのインフラ管理者など、多

岐にわたる関係機関との調整もURの役割だ。各方面と連携をとりながら、URならではの中立公平な立場で事業の推進エンジン役を務めてきた。

大がかりな区画整理事業に加え、交通広場や周辺道路などのインフラの整備もURが担当した。

「交通結節点の核としての機能だけでなく、日本の玄関口として訪れる人をおもてなしし、交流の場となつてほしい」という大田区の要望で広場の舗装は1つ1つ模様を変えするなど、機能だけでなくデザインにもこだわった。丸田は「開業ギリギリまで手間をかけた。私にデザインした図案もどこかにあるはず」と笑顔を見せる。

新産業の創造と発信の拠点に

大田区が公民連携で進めている大規模なまちづくり。2022年のグランドオープンでは、さらに先端医療研究センターやアート&テクノロジーセンターの開業も予定されている。

大田区空港まちづくり本部の鈴木孝司事業調整担当課長は「大田区はものづくり企業の集積地で

「ヨン」と自動運転技術の研究開発・実証実験を行う「先端モビリティセンター」。テスト道路では、ときに自動運転走行のテスト風景も眺められる。

さらに3階上がると現れるのが、足湯のあるスカイデッキだ。空港を間近に望み、時間帯によっては真上を飛ぶ飛行機を見られるとあって、早くも飛行機マニアの

す。それらの産業とここに進出した先端産業が連携して新たな先端技術や産業を生み出し、情報や人が集積して交流する場になってほしい。そして、羽田空港隣接という立地を活かして、日本のものづくり技術や魅力を発信する「新産業創造・発信拠点」にしたい、というのが大きな目標です」と話す。

ここに集積するロボティクスや医療、モビリティなどの先端技術を使って大田区が抱える福祉や交通など地域課題を解決し、区民に還元する意図もあるという。

まちづくりの仕上げに向け、URは関係機関とともに今後も都市公園、周辺道路や水辺空間の基盤整備などを進めていく。

「まちに来ていただくのはもちろんですが、空から多くの方に見ていただけるまちをつくらなければならない、大きなやりがいを感じますね」と丸田。発展を続ける羽田に、また一つ新たな注目スポットが生まれた。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社